

農業共済新聞 千葉版 投稿

掲載号	10 月 2 週号	
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター
	職名及び氏名	上席研究員 岩佐博邦
題名	台木の利用によるトマトの減窒素施肥栽培	
備考	【表説明】 図1. トマトの株当たり等級別収量 表1. 各試験区の施肥量	

【本文】

トマト栽培においては土壌病害対策を目的として台木の利用が進んでいます。接ぎ木栽培では、草勢をコントロールするために、自根栽培より施肥量を減らすことが求められる場合があります。これは台木の肥料吸収が自根と比べて旺盛なためと考えられます。そこで、台木の肥料吸収特性を活用したトマトの減窒素栽培の試験を行いました。

台木には「ドクターK」、「影武者」（以上、タキイ種苗）、「ジョイント」、「マグネット」（以上、サカタのタネ）を用いました。「影武者」と「マグネット」は穂木の草勢が強くなるといわれています。施肥基準に従った標準施肥区と、「ちばエコ農産物」栽培基準に準じて窒素施肥量をほぼ半減した減窒素施肥区を設置しました（表1）。減窒素施肥区の基肥は化成肥料を中心に、リン酸及び加里の単肥を組み合わせる全面施用しました。追肥には液肥を用いました。作型は12月中旬播種、2月下旬定植の半促成栽培、穂木には「ハウス桃太郎」（タキイ種苗）を用いました。黒ボク土のハウスに畦間130cm、株間35cmの1条植えで定植し、5月下旬に8段で摘心、最低温度を10℃に設定して管理しました。

その結果、減窒素施肥区は、標準施肥区と同等の収量・品質が得られました（図1）。草勢が強いといわれている台木の方が、C・D級品を含めた可販収量が増える傾向がありました。栽培跡の土壌（0-15cm）に残った硝酸態窒素量は、減窒素施肥区が0.5～0.9mg/100g、標準施肥区が10.4～13.2mg/100gで、標準施肥区と比べて減窒素施肥区が明らかに少なくなりました。

このように台木を利用することで、土壌病害対策だけでなく、少ない肥料を効率的に吸収させる減窒素施肥栽培が可能になります。栽培跡に残存する窒素量も少なくなり、低コストで環境にやさしい栽培といえます。

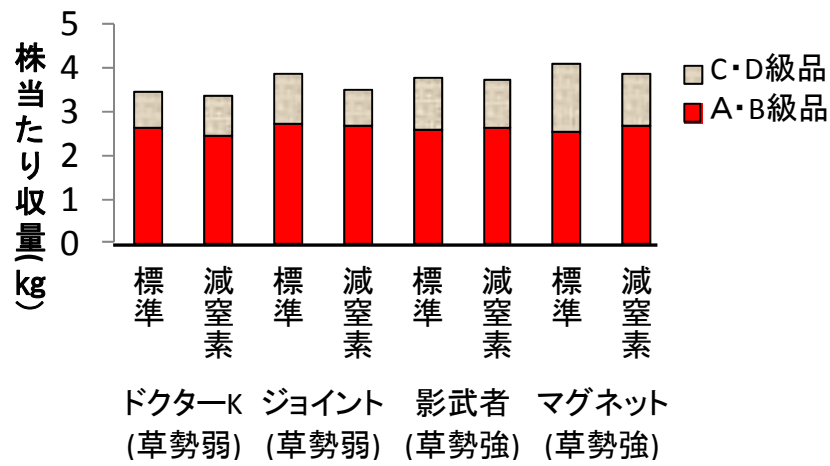


図1 トマトの株当たり等級別収量

表1 各試験区の施肥量

試験区	基肥(kg/10a)			追肥(kg/10a)		
	窒素	リン酸	加里	窒素	リン酸	加里
標準施肥区	15.0	26.0	15.0	15.0	6.0	12.0
減窒素施肥区	7.5	20.0	15.0	10.5	4.2	8.4